

春の日の信号機

兵庫県立芦屋国際中等教育学校 5年 赤木 ちより

私は信号を守るのが好きだ。ちゃんとした人間になれている気がして。

でも、こんなことを誰かに言えば、「変な人ね」で終わってしまうから、私は横断歩道を見るたびに、気持ちに、言葉に、蓋をする。

「三葉さんは授業態度も良いですし、成績も伸びていますね。」

「いつも冷静で、周りのみんなからも信頼されています。」

使いまわしていきそうな定型的な文で、母は笑顔になる。家での過ごし方や進路のことに触れながら、滞りなく面談の時間が過ぎていく。

「今日はありがとうございました。」

母がそう言い、私も頭を下げる。

面談では怒られたことがない。かといって、特別褒められたこともない。それなりの成績で、ニコニコしながら友達と喋って、先生の言うことを守っていれば、おかしいところなんて何もない真面目な生徒として周りに溶け込める。

だから今、校則を破って学校を抜け出していることに、自分でも驚いていた。

春の暖かくて、うざったい陽の光が、胃の中で渦巻く気持ち悪さを増長させる。六時間目は、確か校外学習の班分けをするはずだった。参加しなかったら、仲の良い友達と同じ班になれない可能性が高くなる。でも、そんなことはお構いなしに、どろどろとしたものは喉までせりあがってきて、とてもじゃないけど私は授業を受ける気分になれなかった。

気づけば、教室から逃げるように階段を駆け下りて、校門の外まで走り抜けていた。授業中の学校は、牢獄みたく絶対外には出られないと思っていたから、ずいぶん呆気なかった。

学校の近くの公園には誰もいなかった。さびれた木のベンチに座って空を見ていると、不思議と自分が安心していることに気づく。こうやってルールを破ったのは初めてだ。私は一体どうしちゃったんだろう。保健室に行くとか、早退するとか、もつと違う方法もあったのに。後悔しながらも、うざったい陽の光は心地の良いものに変わっていて、気分が悪いのも、怒られるかもしれないという不安もなくて、また不思議に思う。この公園よりも、もつと学校から遠い場所へ行くのもいいかもしれないなど、ゆっくり動く雲を眺めながらぼんやりと考える。

結局、私は六時間目が終わると同時に学校の門をくぐった。先生には、保健室に行く途中にお腹が痛くなってトイレにこもっていたと言うと、すんなり信じてもらえた。嘘

をついた罪悪感は少しあったけど、ひとつ怖いものがなくなったような、そんな感覚の方が強かった。

大人になった私は、今日も信号を守っている。でも、たまに仕事をサボるし、ポエミ―なことを言って「変な人ね」と言われるようになった。今は、そんな自分が好きで信号を守っている。